



三省錄

一

9
3780
1



3780
1

理齋志賀翁著
德齋原義補訂

氏里以所
不計番所

三省錄

五卷

天保十四癸卯
正月官許新鐫

潤身堂藏板

明弘治十八年
正月二日
小田房重氏
長安左部
伏雲贈

三省錄序

陽德齋

古之聖人。素衣服。教飲食。擇事室者。
非惟人身之安息之計也。蓋所以
使其知貴賤等給之度也。然則
衣食住三者。生於禮義。不可一日而
闕者矣。書云。欲敗度。縱收禮。而志
於道者。名守其分。節儉以脩其身。

則可以免踰等僭上之戾也。且夫爲
人之情。少得安息。執獨獨者。既
獨獨矣。或至破產以滅身。而不快
歎哉。余親生考。理齋翁。嘗輯三
省錄。將以爲世俗之針砭。而有言
涉觸諱者。故此書不行而沒。是爲
遺憾。今茲壬寅。官起維新之

政。以獨獨者之弊。弛繳。慰之。今以開
之議之路。是乃不爲天下之大快
事哉。於是此書亦遂曰公許。壽法
梓以行之。使世人由焉以知聖賢守
分之要。則庶幾不助風教之一
鳴呼。使先考遇新嘉世。則又必有
以建議者。今則已矣。刺刺之。一

一也。不能自禁。因叙舊之。以寘其首云。

天保十三年壬寅臘月上澣

江都德齊原義正道甫謹後



閻九鶚書



三省錄序

甚矣世之曰趨侈靡也。韃橐以來。昇平二百年。人民逸豫。衣非綾羅。不服食非珍羞。不飽居競華麗。器翫奇巧。噫。土階三尺。遂變為瑤臺百丈。可不慨嘆我我。

神祖之龍興也。身在于戈之際。備嘗艱苦。及其海內蕩平也。儉以率民。矯豐臣氏之奢極而救。國家之靡敝。予民休息。所以有今日鼓腹之樂也。夫國奢則示之以儉。方此之時。上不尚儉節用。則國靡敝而民疲極矣。志賀子堪有慨于斯。乃輯錄吾邦明君賢相言行。涉于儉者數百條。題曰三省錄。省減衣食住三者。不使趨奢也。

しつなり況諸侯よりいりやむや大丈夫なるもの
男嬖女嬖衣服の美悪かどううや用るものあつたの
ひのふま賤きものたけのふのふ大事と任ふるもの成るま
るるも道を求るものなるなりあふりもあつたもの
るれはかたうとく彼は詳るれを略るれはくは叶は
ざる事なり孔子を士志於道而恥惡衣惡食者未足與議
也といふ先王といふもの諸侯の世子なりけりぬ
向く女中の手は育ちふなり衣服のよりけりけりけり
それ好むなども女中めだるひいづれなるもけりけり
時のいづれなるもの好むもの大なるものなりけり
畢竟はきけりぬ婦人の手はきけりけりけりけりけり
高き

のうの小児八年のわやもきけりけりけり衣服はきけり
やのう其家風も厚くきけりけりけりけりけりけりけり
いづれなるものけりけりけりけりけりけりけりけり
見れぬものなり婦人に小児のけりけりけりけりけり
それやのうを好む男子とも女子ともいふ芝居役者なり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
あやなりけり 燈前漫録

○何る老女けりけりけりけりけりけりけりけりけり
んい花を襟のふりけりけりけりけりけりけりけりけり
取取襟のふりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
のふけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
西 崔 織 留
貞享の頃の作

のうたはいつとも同人のうた止高は同人一日古に日野れはく
羽織で忍一出仕はるが居今日饒らけしういふや同々ふ
ち十段答へ今日ハ学校へ試業へけりけいといふ試業とい
誓古の人文藝武藝よりけり一統その業の進退であらう
らうといふその日侯も出産は成るものもけりけいといふ
親類々名代何れは次は家の家元次は学監学頭次は師役
のゐるお侍もその前には誓古人を人げに居るものといふ
業をつとむるものもけりけいけりけりけりけりけりけりけり
と忍一なるなり 肥後物語

○すゝ同書小坂田孫左衛門江戸へ肥後の士と出會ひ忍一は角物
のうたはいつとも同人のうた止高は同人一日古に日野れはく

答へ當時は玉用不承とて諸士一統儉約と云ひ正月の朝礼
質斗目板抄で忍一平日ハ一統孫左衛門なりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
のけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
の間なり役をつとめ彼は役人とな上下なる肩衣と云ふは
は他人の用ゝ網より肩衣と云ふは二十四年の間右に肩衣と云
ふは他人の用ゝ網より肩衣と云ふは二十四年の間右に肩衣と云

○柳營鶴が同社系のとて吾妻四郎助光鎧籠の喰ふるが唐茶と
謂ふ侍もて願くけりけりけりけりけりけりけりけりけり
上は時ふ上忍一はく曰右大將以来社系よりけりけりけり

ともやめ極こぎゆの小土器こつぎは味噌みそのサ―付つるで取とるもや
 豆まめりぬとて酒さけとてかゝるゝるもやつきぐまぐまは刀やいばとてり
 時頼ときより日本にっぽん六十余むそあまり所の兵へいるの権けんをとる人ひとがありて
 今封鎖ふうさの代よはせきゝる士君子しきんしのももやをねねて
 あやゝひるゝうたゝもれ代よとてうたゝも人ひとの病やまど
 へいりてはりぬ

理齊日閑田耕華小或々の晴きのよりつて向小憩と因僚の
 へら借り小なり終ふと即一き使小糸すより答ふく又策
 一あり内、掛於二入く有とあん専ぬの老人雑話も何
 栗殿の會に思ふ古ひるを、小豆餅のところへたるを
 盛くおされたる斗なりされた飲ハ上手と記せり貧富を

實素^{じつそ}なる時^{とき}風^{ふう}忍^{しの}ぶと^とも何^{なん}ものも^も 倉^{くら}増^{ぞう}長^{ちやう}生^{せい}るり^り 太^ふ太^ふ此^こ代^{だい}の
 な^なひくを^をい^いひ^ひ白^{はく}川^{せん} 度^た法^{ぽう}執^{しつ}政^{せい}の^の折^せく^く 誰^{たれ}能^ぞつ^つる^る 歌^{うた}と^との^のや
 小^こ小^この^のう^うへ^へは^は降^ふく^くよ^よき^きく^くで^で 厚^{あつ}衣^ぎの^のう^うみ^みく^く 折^し束^{ばく}れ^れ 愛^{あい}を^をこ^こく^く
 中^{なかつ}倉^{くら}右^{みぎ}大^{だい}臣^{しん} 実^{じつ}朝^{あそ}の^のや^やの^のみ^みれ^れ 夫^そが^がみ^みく^くは^はく^くら^らふ^ふ 小^こ小^この^の上^{じやう}は^は
 何^{なん}も^もな^なら^らぬ^ぬ 多^{おほ}多^{おほ}の^の志^しの^の原^{はら}と^とつ^つて^て 歌^{うた}は^は誰^{たれ}能^ぞみ^みく^く
 なる^{なる} 屋^やく^く ぐ^ぐ 難^{なん}有^{ゆう} 御^ご代^{だい}の^のや^やも^も 何^{なん}も^もな^なら^らぬ^ぬ

みるる屋ミヤ々々ミヤミヤ 難有御代ミヤミヤ 何々ミヤミヤ も何々ミヤミヤ あらうづ
 御家人ミヤカの内うち 托樂トクと好ヨシき色いろは腕うで目めも折よぬ身みと持も疑ぎくはての
 もねねくあはれづもねねね 身みもねねのきんねんも山さん幸しやう大だいのい
 木き様やう子こ小こ屋や成なりは生なま後ごをお考えがに交た才さい一いつ風ふう信しん逢あく美み麗れいは
 ねねねねはあはれはうて華は麗れいの風ふう北きたのきん大だいの二に三さん石いし以下
 大だい才さいのおより記おきねねを小こ才さいのおのお習しゆうお及およびねる

そお侍とあやひとく有るいと尊へりいれ外に玉那れ
守護する大名の家の用人重き役家のやのたりとも
つねに上下忌みいゝあるをなすうい衣持衆に
諸所より一重なりごとく仕てり満ちん大なりとあり
前よりとも有るうい右田村の家老とも呼りう
かきけり家お身上げ合の成中い玄圃おも五次役の者
どもあや肩衣で忌きううけり此方おもな格なり
付振との家付池田でな松村孫をまじり侍と初
五上下で忌き五次役おけり付いりきより日新い我ハ素原
玄太夫山屋庄をまじり小身い士商人より玄舞い定嵩で
お勤りいお小山屋茂と統中小身い系孫をのりきり

おやみおはる子忌指は忌き半襟でうけられ忌
一古ねいと袴き忌のういおねいねいと進むも
政い家であより忌居りいり今よりより七十
五六年より日新よりいあり 落穂集

○御當城に於て出陣男女衣振あて家と日新と今や相
かきりいあやうききり答い曰たのいかきりなり但家お
承りたる家あるい
権現様い代い家いけりい
台徳院様 大猷院様御代いけりい
やも政うけ御城内い新屋い小使おきもつてい
い一重のきい店中い家い格別い外平御高座い家

居たり一箱をききとて中々々前年は神の祭の時ハ
髪を束ねて女の如くしむるは上下成るるが今ハ形を女
衣振小振りぬと嘆じたりは時々漸くあるやその華
るふ衣と天鵲織錦をその衣服とする天明の度海老
三社神像の祭小天鵲織の足代を以てしたるは
のその月日一いふふねとて今の時ふりて女児た
お目よけふ本復々履のそれ故は天鵲織成用也とて
何や——とてその衣にあらざる安永の度好色の小筆
有るは信の郡国信礼小袖とて本條文紗で画し
帯はめりていそいそ着の振なりなり今ハかき
その代へ——人ふもさ—— 露木直信話

○浅井一翁曰た店室の古に土人中傳と云日本橋始々然る時

尾張殿紀伊殿いふとある人々彼ノ普請場いふ
を往きの一草のいふ附とて急ぎ終——とて 落穂集考

○砂丸る場やいふとある——とて柳むる雨降東南の如矢倉へ

卿入雨のときしるは侍のうち往來とていふは揚子とていふ
青柳傳四郎とていふ姓立純子の袴とて投立する羅紗と
雨羽織救赤屋足帛とていふ本履より人々長柄ののりりさ
さを通りけるその衣は救三葉の海とていふふい——とて
や立本御羽織とていふあがきとてさ——歩行とて拾二三人生いふ
はまき海とていふとていふ衣とていふ通る小袴とていふ三葉の細川
新中も忠無とていふ初よりいふとていふるる——とていふの甲斐

ぐしをえんよ式石を居る身は疎く本御羽織
 手ははし徒士のもの鬼の子の振るうで大勢つき
 毎く利殺さよ何とてや武士を殺す切米は松竹四郎
 かうもて立止る屋敷言ふ本殿長柄のうらうは
 かけさ防柵も能く仕うる中人の苦悪は平五郎
 賢愚が知るうけいけい板敷が仕形は恥し居る
 紀公言行録
 ○さて衣類をねき十三のうた手地もの足腰のうび
 よりおのりうりその一ツうびと十七の年迄思ふ
 よもも祿がおる難儀おつてせめてねのわする程の
 かうびう一ツわしややねりあははやむうい不自由なり
 ておのりうりうり飯を喰ふうりうり愛もないう
 抱食

とくふもなる今時の若れ衣類のものを好むるを
 考へ金銭費へ金持の色くれ好むうりてをうり海法の
 加たてやううりうりも老松のうりやううりうりね
 坂あな子供ともは老松のうりうりうりうり
 おんうりうり
 ○今の蘭箱は横箱のうり蓋ありを世の制儀ありけるの始
 り板二斤と云々衣類と扱て扱て扱てと不便なり
 うりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
 里本信間子と私と判りうり考あうと々々お家の蘭
 箱の列あはる金銀でいて飾りあるひい文彩と云々
 教と云うり三ツ四ツあるあはるひい蘭者の先子ありあはる
 蘭者の好子あり此一物と云うのは式あり武家の事なり

とろろ家の人もあまを持てむる流儀に化せられたる之録

○ある人菅仲の他形りこそ兄をぬきぬのあづけに権邸氏活
家へ金銀子あらずとも漏れぬやうに彼をみきりあへ
こそ腹ふまはし一宮へ移籍しあらずともひびくね
ばより素衣色形くとも賢く神にばより

○むりい四月より伊勢候子と板子とて賣つた
價いさぬわどにかびらと縮きふとして賣つたこの
言ふの縮きうやんかびらとあつたすの縮きも折て
易す價いさぬあふぬと近き良半晒すの縮きも折て
つぎも言ふ縮きも折て良半晒すの縮きも折て
なるお淑用する小候子を結候子を用ふ板にあれ

古老
物語

○むりい奥方息女方お神社仏閣へ参詣し節いさげ髪を

竹付の上で髪を女中の帯に今織金入る幅に三寸斗
針お腰元を右を通の帯も長さいせらあするし端女
本孫金入る本孫も金糸入織る帯御用寛文の
もあつたよふ帯に巾度くお延寶のいさう巾度く

数往子三ッ割長さも帯大経お淑用 同上

○都風候かむむりいえびす屋吉市を右近源太が女
としてあややし折に手拭おひとさ縮切をかかふ
女がこれこそ云ふ今い何もの仕あつたむ綱でもう曹
とらうそき髪を梳かひらと名付くこのあつた
りあつた云云 延寶九年の事なり

一、歌殺より、あまのまじり、なれば、うきまの、あまのまじり、あ
 感、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 個、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 づ、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 の、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 候、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 も、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 ぐ、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 匠、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 たり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 成瀬小吉正成、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ

ね、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 何、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 後、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 神、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 一、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 今、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 成瀬正成傳

○む、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 五、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 六、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 七、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 八、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 九、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 十、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 十一、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 十二、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 十三、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 十四、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ
 十五、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あまのまじり、あ

立ちあがりたる小女に
老若中多し白髪にすくく
もやも十七八りのものも
信阿のいへは行丹後いふ
お帯もさう度なむむなる
やういふと牛のやうな
一振るもあまきい女な
小袖の紋付を脱ぎぬ
老の女は髪をさく小女
髪をさくつねの女と風
帯はけさるたお花女い
るも二十四十の女も老
いふは紋付ものさへは
お帯もさう度なむむなる
やういふと牛のやうな
一振るもあまきい女な
小袖の紋付を脱ぎぬ
老の女は髪をさく小女
髪をさくつねの女と風
帯はけさるたお花女い

るも二十四十の女も老
いふは紋付ものさへは
お帯もさう度なむむなる
やういふと牛のやうな
一振るもあまきい女な
小袖の紋付を脱ぎぬ
老の女は髪をさく小女
髪をさくつねの女と風
帯はけさるたお花女い

古老物語

○はる久し上代の衣裳櫛の
いふかうい上代の櫛の
今も衣類ののるおをソ
お小櫛上代の衣をさ
ううさうこれの櫛の皮
ねるもねるもさうとき
はる久し上代の衣裳櫛
いふかうい上代の櫛の
今も衣類ののるおをソ
お小櫛上代の衣をさ
ううさうこれの櫛の皮
ねるもねるもさうとき

